

平和の語り継ぎ部として

糸満市立糸満中学校三年 松島 柑奈

遙か遠くまで広がる青い空。エメラルドグリーン色の海にキラキラ輝く太陽。六月二十三日、慰霊の日。私は空を見上げて深く目を閉じ、「あの時」のことを想像した。青い空は灰色の爆撃機で埋め尽くされ、空から浴びせられる爆弾の雨から逃れる人々の姿。大切な人を次々と失いながらも自らの命を守るため逃げ惑う大人達、子ども達の笑い声は消えた。逃げ場を失った人々は、戦争を憎み、家族への想いを抱いて崖に飛び込み、自らの命を絶っていく。目を背けたくなる悲惨な出来事に私は思わず体を震わせる。そして、そっと目を開くと、穏やかな青い空が広がっていた。私はこの青い空の下で再び、未来への「平和の語り継ぎ部」として生きていこうという強い想いを新たにするのだった。

私が沖縄戦について知ることになったのは、小学二年生の時だった。それまで本土に住んでいた私は、戦争や平和について意識することもなく、終戦記念日や原爆投下の日に合わせて黙とうを捧げる程度だった。しかし、沖縄に引越してきてからは、戦争や平和について考える機会が多くなった。私が学校に行って驚いたことが、学校行事の中に「平和学習会」や「平和集会」が位置づけられていることだった。毎年の集会や学習会では、戦争体験者の方から話を聞いたり、実際に沖縄戦に関する戦跡地や資料館を訪れたりした。私は、毎年のこのような学習を通して、沖縄戦があったことや、罪のない多くの人が命を失ったことを知った。また、六月二十三日が沖縄だけに「慰霊の日」が設けられていることも驚きだった。その日のテレビ番組では、平和祈念公園での慰霊祭の様子と共に、黒い石版を撫でながら、涙を流すお年寄りの姿が映し出されていた。私はこの光景を見て、「この石板にはどのような意味があるのだろうか」と疑問を抱いた。そして、その年の平和学習で私は、初めて平和祈念公園を訪れ、「平和の礎」のことを知った。礎には沖縄戦で命を失った多くの人の名が刻まれていた。テレビで目にしたお年寄りには、きつと沖縄戦で家族を失い、礎に刻まれた愛しい人を想って涙してたのだらうと理解した瞬間、私の中で言葉にできない悲しみが生まれてきた。

石に彫られた名前を撫でながら亡き家族を想う切なさ。この礎に刻まれた人々の分だけ、同じ悲しみがあるのだろうかと思像すると、心が張り裂けそうだった。その後を訪れた平和祈念資料館でも、数々の悲惨な写真を目にし、私の知らなかった沖縄戦の実情を知ることができた。さらに、轟の壕で体験したことが私の平和への想いを強くすることとなった。壕の中は外の太陽の光を包み込んで、しまうほど暗く、懐中電灯の光だけが頼りだった。壕の奥に進んだところで、ガイドの方が「電気を消してみましよう」と呼びかけた。一瞬にして壕の中は暗闇となり、近くににいる人の気配は感じて何も見えず、同時に恐怖心でいっぱいになった。今でさえこんな恐怖心でいっぱいなのに、戦時中の人々はどんな気持ちでこの壕に身を潜めていたのだろうか。人々が暗闇の中で不安や悲しみに耐えていた様子を想像すると、私は心が締め付けられる思いだった。

私は様々な平和学習を通して、沖縄戦について無知だった自分が情けなくなつた。それと同時に、あのまま本土で過ごしていたら、こんな悲惨な出来事が同じ日本で起こっていたこと、沖縄の人々が「命どう宝」と訴え続け、平和を願っていたことを知らずに過ごしていたかと想像すると、とても怖くなった。平和に過ごしている自分を当たり前だと思っただけで、今の平和が過去の惨劇から学んだことで生まれているということを意識しながら過ごすことでは大きな違いがあると感じた。そこで、私は、沖縄だけでなく日本中に沖縄戦の悲惨さや平和の尊さを伝える役割を担いたいと思うようになった。しかし、何ができるか正直分からなかった。そんなとき、中学の同級生が「糸満市平和ガイド」として、沖縄戦について学び、学んだことを伝える役割をしていることを知った。戦後七十五年となる今、確実に減少してきている戦争体験者から話を聞き、それを自分の言葉で語り継いでいくという役目だ。「それなら私にもできるかもしれない・・・。」という気持ちで私の中に湧いてきた。近い将来、戦争体験者から話を聞くことができないうら。だからこそ、今に生きる私たちが戦争体験者から話を聞き、その方々の記憶と平和への想いを語り継いでいく。「平和の語り継ぎ部」として、未来の人々へ、語り継いでいかなければならない。悲惨な戦争の実情と、その中で必死に生き抜いた人々への平和への願いを。私は未来への「平和の語り継ぎ部」としての使命を持ち、生きていこう。そう決意して、再び青い空を見上げた。